【資料解題】

江戸期昔話絵本 ―『赤本再興　花咲ぢゝ』について（一）―

赤羽根有里子

要旨　本稿は、江戸期昔話絵本『赤本再興　花咲ぢゝ』の書誌的事項の調査と翻刻をおこない、その内容を記するものである。本書は、昔話「花咲爺」の一作品で、式亭三馬作、歌川国丸画、文化九年（一八一二）に出版された合巻体裁の絵本である。紙面の都合で、作品の写真版（コピー）及び翻刻の掲載は前半部分とし、次回その後半部分について記す。

国立国会図書館所蔵『赤本再興　花咲ぢゝ』について、次の項目に従って述べる。

一、書誌的事項

二、写真版（コピー）及び翻刻（表紙～七丁表）

一、書誌的事項

本書は『補訂版　国書総目録』に

花咲ぢゝ　はなさきじじ　三巻　㊟赤本再興　㊥合巻　㊟式亭三馬補綴　歌川国丸画　㊟文化九刊　㊟国会・東大

と記されているうちの国会図書館蔵本である。『改訂　日本小説書目年表』には「合巻本　文化九壬申年出版」の部に

◎赤本再興　花咲爺　三　式亭三馬　歌川国丸

作者は赤本の文章に倣ひ、画工は赤本の筆意を模した書、表紙に倣富川吟雪寫意とある。

とあり、『新編　帝国図書館和古書目録』には

花咲ぢゝ（赤本再与）付外一種・三巻・式亭三馬著・歌川国丸画・文化九年

と記載がある。

以下、本書の体裁を記す。

（一）表紙　原のもの。丹色。寸法　縦　十七・八㎝×横　十二・三㎝

（二）題簽　原のもの。絵題簽。慳貪爺婆と犬（右上の丸窓の中に正直爺と殿様）の図で、いずれも本書中の登場人物や場面を取り入れたものである。外枠に括り猿の模様があり、申年出版であることを示す。左上に「赤本再興　花咲ぢゝ　全三本」、左下に「壬申春つる金板」、右に「倣富川吟雪寫意」「式亭三馬子重編」「歌川國丸画」の文字。寸法　縦　十四・二㎝×横　十・九㎝

（三）本文匡郭　寸法　縦　十五・六㎝×横　十一・二㎝

（四）柱刻　花さき　壱　の体裁で一～十五

（五）紙数　十五丁
（六）刊年　十四丁裏に「文化九壬申年」、また本書の裏見返しの広告「當さる乃とし新版稗史目録」に本書の記載があり、同広告に記載のある「赤本再興 桃太郎」が文化九壬申年の正月に開版されていることから、文化九年（一八一二）。
（七）画工　表紙及び十四丁裏に「歌川國丸画」とあることから、歌川国丸。一丁表の序文、裏見返しの広告の中にも記載がある。
（八）作者　表紙に「式亭三馬子重編」、一丁表の文末に「式亭三馬」、十四丁裏に「花さきぢゝ三冊　赤本の文法にならひて式亭三馬補綴」とあることから式亭三馬。「作」ではなく、「補綴」と記されているのは、赤本類の古調に倣うという本書の趣向を明確にしたものと思われる。裏見返しの広告には「同作」（式亭三馬）とある。
（九）板元　表紙に「壬申春つる金板」、十四丁裏に「田所町　つるや金助」、表紙見返しの広告に「書物竝錦絵草紙問屋　江戸田所町　つるや金助板」、裏見返しの広告に「書林　江戸田所町つるや鶴屋金助板」とあるところから鶴屋金助。
（十）広告　あり。表紙見返しに「文化九壬申年新版稗史目録」、裏見返しに「當さる乃とし新版稗史目録」、五丁裏に式亭三馬店の広告「江戸の水」、十五丁表に式亭三馬店の広告「仙方延壽丹」。

なお、東大本は本書と同板本であった。

本書は、『補訂版 国書総目録』及び『改訂 日本小説書目年表』において、合巻に分類されているが、十五丁という短編で、画風は富川房信（吟雪）風、内容は昔話「花咲爺」であり、合巻としては特殊なものである。

また、本書は「赤本再興」という角書が示すように、赤本という初期草双紙の形態や内容を再現することがうたわれているが、そこに描かれる昔話「花咲爺」の筋立ては、赤本の「花咲爺」作品そのものではない。

例えば、赤本『枯木花さかせ親仁』に見られ、黄表紙作品の一部にも引き継がれた「正直婆が川で子犬を拾う」という発端は、本作品には見られない。その一方で、本書の「慳貪爺婆が正直爺婆宅に盗みに入り、その後雷に掴まれて死ぬ」（十二丁裏～十四丁表、次号掲載予定）という筋立ては、管見に入る限り他の「花咲爺」ものには確認できず、本書のみに見られる特徴である。そこには、三馬の創作意識がはたらいていると考えられるが、これについては稿を改めて記す。

二、写真版（コピー）と翻刻

〔凡例〕

（一）各丁は片面あるいは見開きごとにまとめて丁数を示し、上段には原本の写真版のコピーを、下段にその文字部分の翻字を示した。
（二）翻字は、紙面の許す限り、文字遣い及び表記記号、文字の位置を原本のままに再現することを目指した。ただし、登場人物の着物に付された（登場人物名を示す）文字は省略した。
（三）翻字において使用した記号は以下の通りである。
①翻字が不確かな箇所は右側に傍線を付した。
②判読不能であるが、他の資料等から推定した箇所は〔　〕で示した。
（四）仮名、漢字等の表記は、次に示す原則により行った。
①文中における片仮名「ミ、ハ、ニ、ワ」は、それぞれ「み、は、に、わ」と平仮名で表記する。
②意識的に用いられていると思われる片仮名（感動詞など）や捨て仮名として用いられている片仮名は原本のまま表記する。
③旧字体の漢字は現行の新字体に置き換え、新字体のない漢字は原本のまま表記する。ただし、異体字や俗字は原則として基本形に置き換える。
④仮名遣いは原本のまま表記するが、変体仮名や合字は通常の仮名に置き換えて表記する。
⑤固有名詞、その他特殊なものや文字に意識的な意義づけがされているものは、原本のまま表記する。

本稿の写真版（コピー）及び翻刻の掲載につきましては、国立国会図書館のご許可をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

（表紙）

赤本（あかほん）
再興（さいかう）
花咲（はなさき）ぢゝ

全三本

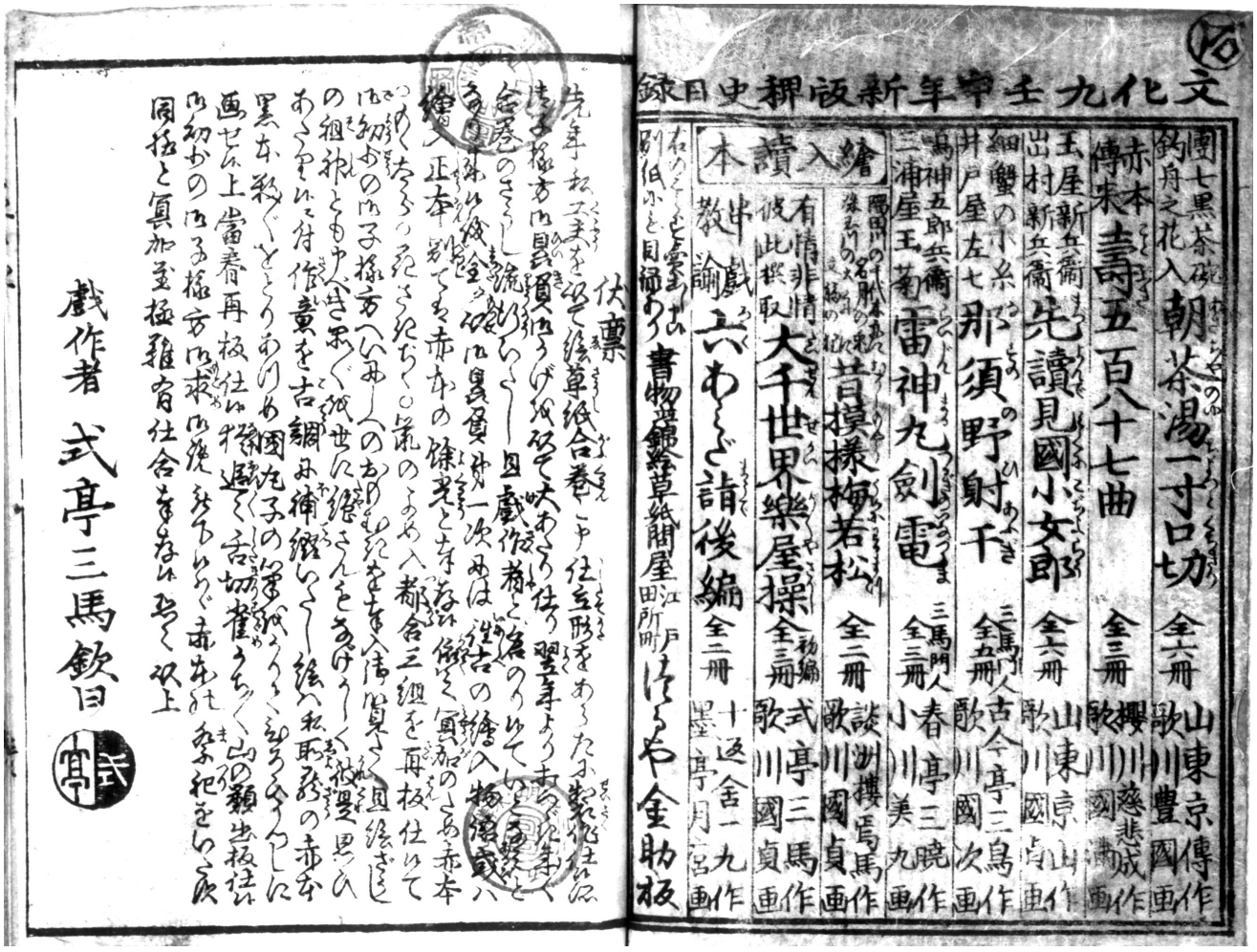
文化

壬申春つる金板

倣富川
吟雪
寫意

式亭三馬子
重編

歌川國丸画



（1オ）

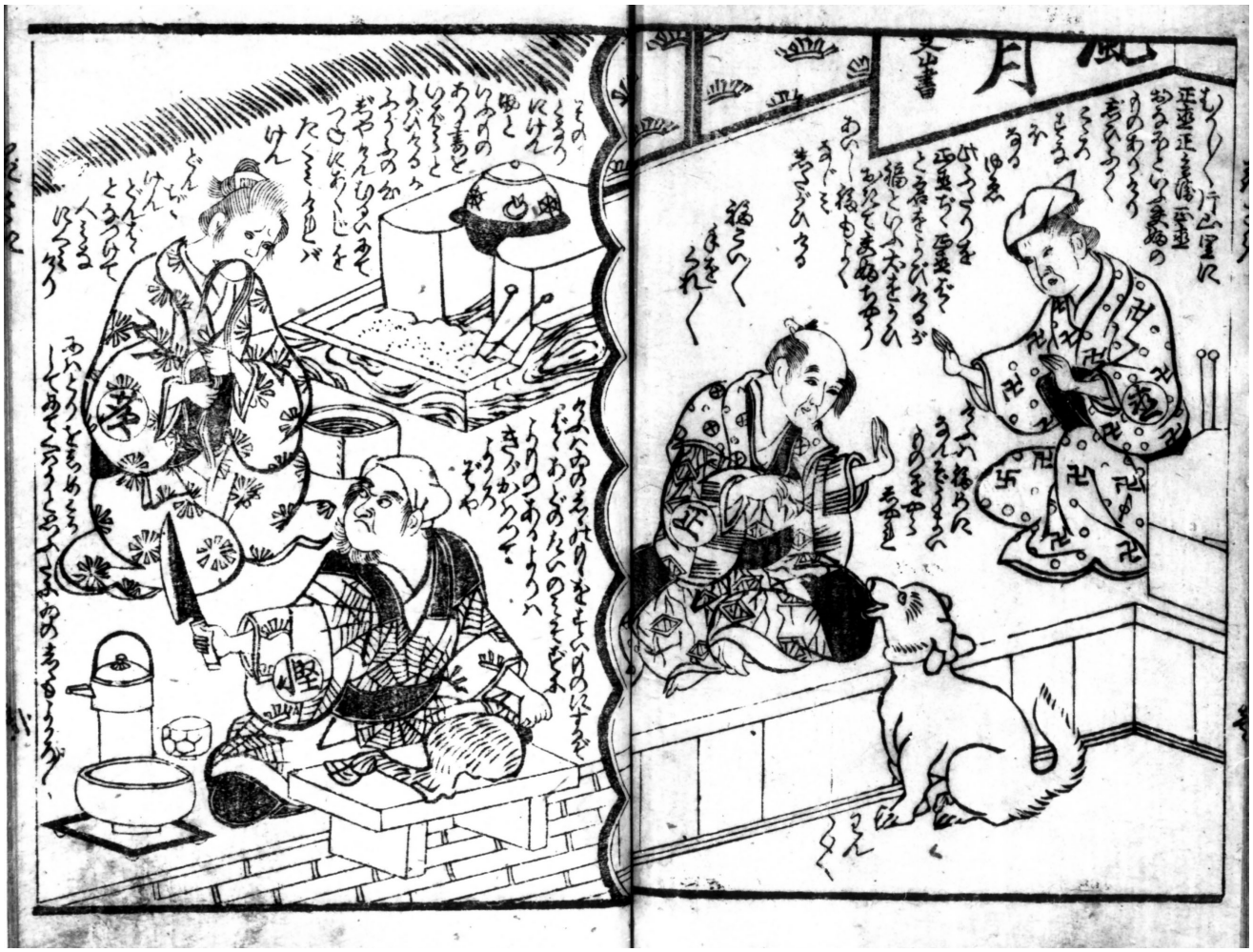
録目史稗版新年申壬九化文㊀

團七黒茶碗 釣舟之花入	朝茶湯一寸口切	全六冊	山東京傳作 歌川豊國画
赤本 傳来	壽五百八十七曲	全三冊	櫻川慈悲成作 歌川國満画
玉屋新兵衛 出村新兵衛	先讀見國小女郎	全六冊	山東京山作 歌川國貞画
細蟹の小糸 井戸屋左七	那須野射干	三馬門人 全五冊	古今亭三鳥作 歌川國次画
鳴神五郎兵衛 三浦屋玉菊	雷神丸劍電	三馬門人 全三冊	春亭三曉作 小川美丸画
隅田川の千代木舟に 珠玉川の出舟に 文福の狸	昔模様梅若松	全二冊	談洲樓焉馬作 歌川國貞画
有情非常 彼此撰取	大千世界樂屋操	初編 全三冊	式亭三馬作 歌川國貞画
絵入讀本			
串戲 教諭	六あみだ詣後編	全二編 十返舍一九作 墨亭月啓画	
右のこらず売出し申候 別紙にも目録あり	書物並錦絵草紙問屋 江戸田所町 つるや金助板		

伏　稟

先年私工夫を以て絵草紙合巻と申仕立形をあらたに製作仕候
御子様方御贔屓御かげを以て大あたり仕り翌年より打つゞき年々
合巻のさうし流行いたし且戯作者と名のり以ていとなみと
なり参候を全ク以御贔屓第一次には往古の絵入物語或は
絵入り正本別ては赤本の餘光と奉存候　依つて冥加のため赤本
〇もゝ太郎〇花さきぢゝ〇鼠のよめ入都合三組を再板仕候て
御幼少の御子様方へいにしへのおもむきを奉入御覧たく且絵ざうし
の祖神とも申べき品々を世に絶さんとなげかしく彼是思ひ
あたり候二付作意を古調に補綴いたし絵は私所蔵の赤本
黒本数々をとりあつめ國丸子の筆をかりてひろひうつしに
画せ候上當春再板仕候　猶追々舌切雀かちく山の類出板仕候
御幼少の御子様方御求御覧被下はゞ赤本の祭祀をいたす
同様と冥加至極難有仕合奉存候恐々以上

戯作者　式亭三馬　欽白



（1ウ）　　（2オ）

［風］

［月］

又山書

むかしく片山里に
正直正兵衛　正直
おなほといふ夫婦の
ものありけり
じひふかく
こゝろ
すな
ほ
なる
ゆゑ
此ふたりを
正直ぢゝ正直ばゝ
と名をよびけるが
福といふ犬をかひ
おきて夫婦ちやう
あいし福もよく
なじみ
したがひける
福こいく
手を
くれく

けふは福めに
なんぞうまい
ものをやら
しやれ

わん
くく

けふはゐのしゝのもゝをすいものにするぞ
ばゝあどのたいのみそずに
よものあかよりは
きがかはつて
よかろ
ぞや

その
となり
にけん
助と
いふもの
あり妻を
いばらと
よびけるか
ふうふの心
じやけんむるいにて
つねにあくじを
たくみければ
けん
どん
ぢゝ
けん
どんばゝ
となつけて
人みな
にくみ
けり

にはとりをしめころ
してにてくはうと思つたにゐのしゝもよかろく

（2ウ）　　（3オ）

正直ぢゝは福をつれて
れいのごとく山へゆきけるに
松の木のもとにてくんくと
いひつゝをしへければ福が
さしづにまかせつちをほりて
見るに金銀しやこめのうさんご
るりのたぐひ七宝じうまん
しければゝともろとも
さしになひてもち
かへりぬ
福犬かおかげて
たからものを
さづかつた
ありがたや
く

福犬
正直
ぢゝに
たから
ものゝありかを
をしゆる

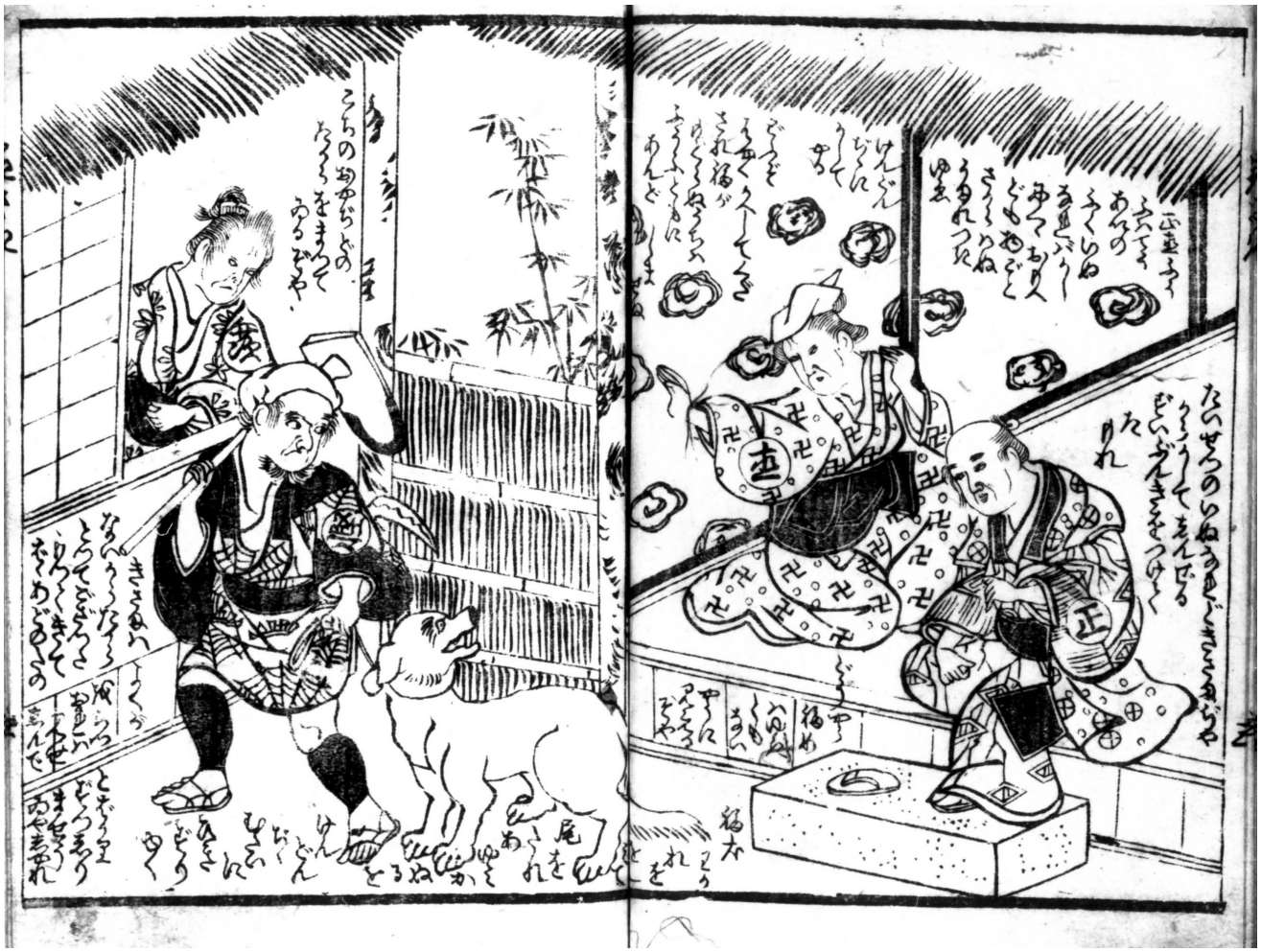
これもみな
天とう
さまの
おさづけと
見えた

さてもけん
どんぢゝは
正直ぢゝが
ほりえ
たる
たから
を
うら
やみ
われも
また
た
から

ありがたやく
福犬には
ほうびを
やり
ませう
此やうに
たからが
ある
とても
おごつ
てはならぬぞや

をほりいださんとて
正直ぢゝが家へ来り
福犬をかりてかへる

おのれが身をわがまゝにもちて
くらしゐるものはとなりの
たからをうらやみとかくそねむ
ものなり世の中の人心みなかくの
ごとしけんどんぢゝ一人と思ふべからず



（３ウ）

正直ふう
ふはてう
あいの
ふくいぬ
なればかし
にくゝおもへ
ども物ごと
さからはぬ
うまれつき
ゆゑ

たいせつのいぬなれどきさまぢや
からかしてしんぜる
ずいぶんきをつけて
たもれ

けんどん
ぢゝに
かして
やる

どうやら
福めは
はゆき
とも
ない
やうに
見える
ぞや

どうぞ
はやくかへしてくだ
され福が
もどらぬうちは
ふうふともに
あんどしませぬ

福犬
わかれを
をしみて

尾を
たれ
あゆみ
をるぬかみ

けん
どん
ぢゝ
むたい
ひき
に
ずり
ゆく

（４オ）

こちのおやぢどの
たからをまつて
ゐるぞや

きさまは　よくが
ないからたからをちつとばかり
とつてござつた　おれはずつしり
もつてきて　見せませう
ばゝあどの　たのしんでゐやしやれ

（4ウ）　　（5オ）

けんどんぢゝはふく犬がをしへにまかせて松の木のもとを
ほりければたからものにはあらずしてへびむかで
とかげのたぐひその外あらゆるきたなきもの
うよく といでければ大きにはらたちくは
ふりあげて福犬を
うちころし松のもとに
うづめ
けり

へびあまた
けんどん

ぢゝに
まき
つく

にくい
ちくしやうめだ
ぶちころして
しまへ

よいきび
く

あんまりにくいちく
しやうだから松のもとへ

うめて
くれて
おれたが
ころした
ことだから
あきらめさつしやれ

正直ふうふは
福犬のもどりを
まちわびてゐる
所へけんどんぢゝ
ひとりかへりて
やうすをかたるにぞ
福犬がさいごを
かなしみなげく

さても
く
ひでうな
死を
とげたことぢや
かなしやく

ぶちころすとは、なさけない
ふびんなことをさ　しやつたのう

（5ウ）　　（6オ）

福犬はある夜
まくら
がみに
たちて
正直ぢゝ
正直ばゝ
に一れい
を
のぶる
たゞいままでの
御かうおんあり
がたうございます
此すゑともまもり
ますから
ごあんど
なされませ

正直ぢゝゆめさめてより
福いぬがをしへにしたがひ
かの大木の松をひかせて
こしらへける

あまりの木は
たきゞにつかひ
ましよ

うすにしてうると
よほどの金に
なれど
福をよそへ
やつては
なら
ぬ

おしろいの
よくのるくすり

江戸の水　四十八文

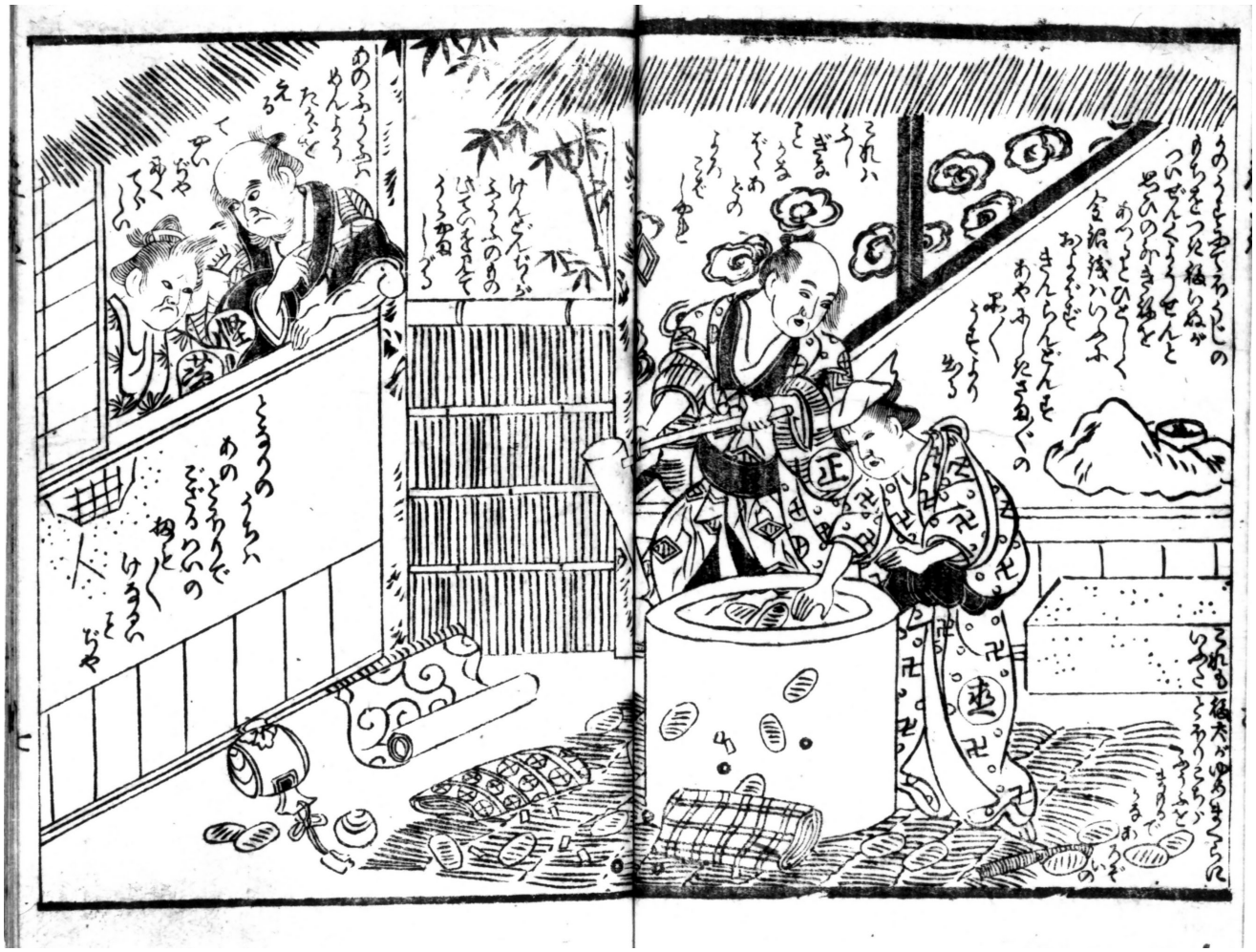
第一きめをこまかにし
御かほのできもの一切に
よしあつささむさに
おしろいはげず
よくのることうけ合也
三馬製
をとまぎらはしき
くすりあまた
出てまゝよくく
名印御改め
おもとめ
可候

わたくしの
うめられた所の
松の大木を
きつとうすに
こしらへ給へとをしゆる

ばんにはあんまのかはりに
酒を十六文おごるべい

ゑいやく

けふは
よほど
はかが
いた
そ
せい
出せ
く



（6ウ）

かのうすにてほうじの
もちをつき福いぬが
ついぜんくようをせんと
思ひの外きねを
あつるとひとしく
金銀銭はいふに
およばず
きんらんどんす
あやにしきさまぐの
品々
うすより
出る

これも福犬がゆめまくらに
いふたとほりこちら
ふうふを
まもるで
かなあろぞ
いの

これは
ふし
ぎな
こと
かな
ばゝあ
どの
よろ
こば
しやれ

けんどんぢゝが
ふうふのもの
此ていを見て
うらやま
しがる

（7オ）

あのふうふは
めんよう
たからを
える

て
やい
ぢや
にく
てら
しい

となりの
うちは
あの
とほりで
ござるはいの
扨もく
けなるい
こと
ぢや

abstract

The author treats “The Old Man Who Made the Dead Trees Blossom” picked up from among the tales of old Japan in picture books issued in the Edo period (17th to 19th centuries). This book, originally titled as” Akahon Saiko Hanasaki Jiji,” written by Sanba Shikitei, depicted by Kunimaru Utagawa, was issued in 1812. The author describes its bibliography and then its photocopies and reprints of its first half part.